

## 被服実習科目の内容に関する一考察

遠山千代子 (上野学園大短大)

【目的】短大家政科の実習科目である「被服構成及び実習」において、近年顕著な傾向がみられる。それは、実習内容(方法・教材など)の変化である。その実態を把握し、変化の要因を分析し、望ましい将来への展望を探求することを目的とする。

【方法】過去10年以上の間に担当した実習科目の内容の変化を顧みる、と同時に社会状況や学生の意識の変化をもふりかえり、その要因を分析する。

【結果】まず、実態として、従来より基礎的であると認識されてきた実習内容の範囲の縮小・技術の低下が顕著である。実習内容の変更(修正・改善)は再々検討され実施されてきた。その背景には、①最近20～30年間の社会生活全般の激変が存在する。衣生活環境も例外ではない。②それに伴う若者(学生)意識の変化がある。豊富な品々とあふれるほどの情報の中で成長してきた若者達の意識と行動は、まさに未知数に満ちている。

対応としては、この動かし難い実態(実習内容の範囲の縮小・技術の低下が顕著)をどのように解釈するかが問題となる。過去に拘泥すると、現実あるいは将来を悲観することになりかねない。しかし、肯定的に解釈すれば、真に必要な範囲や技術が精選される、歓迎すべきことであるということもできる。そのためには、当然、基礎的であるとされることの意味を十分に理解し技術が徹底的に修得できる実習であることが肝要となる。しかも、楽しみつつ独自性を発揮したいと望む若者達が、魅力を感じることでできる実習でなくてはならない。1年次必修では基礎的課題と適度の自由度で意欲が喚起される作品を制作、2年次選択では独創性が発揮され満足度の高い作品を制作し発表する機会をも設定する。